

# 王世懋著「関中紀行」試釈

渡 昌 弘

はじめに

「関中紀行」(『王奉常集』卷一〇所収)は、明代後半を生きた王世懋が、万曆九年に提学副使に任ぜられて陝西に派遣されたときの、四千字余りの紀行文である。執筆の動機は、終わりの部分にあるように、兄の世貞が居ながらに旅行記などを見て楽しむ臥遊に供するためだというが、提学副使としての巡歴の様子がうかがわれる。

『明史』卷二八七の伝によると、世懋は、字が敬美、嘉靖一五年生れ、万曆一六年没。南直隸・蘇州府太倉の人。嘉靖三八年の進士で、南京礼部主事、陝西提学副使、福建提学副使などを歴任した。ここに掲げる紀行文によると、万曆九年の二月から七月にかけ西安府<sup>(1)</sup>と延安府<sup>(2)</sup>を巡歴したところで、陝西提学副使を辞している。以下では、彼が通過した両府下の県ごとに適宜見出し【】をつけ、必要と思われる原文の用語は「」に入れ、括弧( )と註

により説明を補った。

## 一 西安府へ

万曆九年「辛巳」春正月、私は督学副使に任ずるとの勅命を奉じて、陝西「関中」に行くこととなったが、例によって吏部からの命令書「符」は無く、ひそかに旅立った。

### 【華陰県】

二月十日、潼関<sup>③</sup>に入った。吉日を占い、十三日に出発することにした。このとき巡茶御史は病氣のため休暇中であつた。彼を待っていたが会うことは出来ず、そこで夜更けに出掛けた。指折り数えると、以前に華嶽三峰<sup>⑤</sup>と別れてから既に六年が経っていた。関外よりこれらを眺めて、賦一句をつくり、喜びのあまり潼関の伝舎の中に書き留めた。

華陰に至ると、月の光が微かに照る中、それら三峰はぼんやりと見えただけだ。一晚宿り、ふたたび夜明けに出発し、華州を経て渭南を渡り、臨潼に至り宿をとった。

### 【臨潼県】

いわゆる始皇陵、鴻門、新豊には訪れる暇はなく、温湯もまた見る事ができなかった。しかし、それらの所は昔遊んだところなので、また別の巡歴の機会にゆっくりと見物することにした。灊水は水が満ちあふれ、官橋の岸

の柳や南の山々の蒼翠は、もとの景色のままであった。

【長安県（西安府）】

これより長安城（府城）に入った。

凡そ百日余りの巡歴で、足を伸ばせる所は、東が景龍池、西が金城寺、南が大・小鴈塔に過ぎない。

景龍池は、故唐の興慶宮<sup>⑥</sup>の故地である。列なる柏は皆な両手で抱えるほどの大ききで、珍しいかたちをしており、花萼楼<sup>⑦</sup>の遺址が巍然として前に峙っている。基礎となっていた柱は猶お存しているが、削られた木のもくめは残っていない。今、やや西北に凝碧池、沈香亭<sup>⑧</sup>があるが、もともと渾水の溝であった。その後ろは古い木々や蒼い藤が交わり、その前はいま秦王府の外苑となり、完全な姿で残っており、人々に懷古の興きを抱かせている。その昔、董中丞が私を迎えてその地に遊んだことがあり、一緒に詩をつくり、いまも亭の中に刻んである。

陝西「秦地」の景勝は、城南に過ぐるものはない。そもそも終南山<sup>⑨</sup>が天を障り、画を描いたついたてのように列なる。郭・杜・鰲屋の諸阜はその陰に在り、また仰天池などの景勝は書き尽くすことができない。城南の鼓樓に登ると、悠然と遠くを眺めることができる。白鹿原と鴈塔はともに足下にある。

白鹿原<sup>⑩</sup>は平らではないが、ひろく広がっており、漢の文帝の陵はここにある。

鴈塔は故唐の慈恩寺<sup>⑪</sup>である。その塔は空高くそびえ、下に褚河南（褚遂良<sup>⑫</sup>）の筆になる聖教序の二つの碑石をかえ、銅の部分は完全で腐食していないかのである。周囲の石柱には唐人や宋人の名字を鐫んだものが多く、みな奇偉である。塔の南には曲江池があったが、今はみな民田となり、水を勺って遊ぶこともない。

西北に折れると小鴈塔寺がある。薦福寺<sup>13</sup>をこのように名づけたもので、その塔は慈恩寺に及ばないが、寺の広さは方丈（三才四方）あり、甚だ立派である。しかし結局のところ、すばらしさは金城寺に及ばない。

金城寺は長安城の西一〇里にあり、古の無名寺である。梁間は半里ばかりで、樓閣などに松や杉を用いているのは長安随一である。すなわち、ここは秦王の香火院（菩提寺）である。

北の城樓に登ると、涇水や渭水を望むことができ、平原が杳然としている。九峻などの諸山は微かに判る程度だが、最も高く見えるのは嵯峨山<sup>14</sup>という。城中の庭園にある亭には牡丹が多いが、ひとり秦王府だけが大きくて麗しい。

府城の東西にはともに池のほとりに館舎があり、水竹・花木・藥欄を極め、流觴曲水が盛んで、春になると、人々はその美しさに惹かれてやってくる。江南の諸々の名園を見ても、ここには及ばない。

この陝西省では、四回貢生に考試を行ったが、最初は鄠乾七州縣<sup>15</sup>の生童に対して行った。

時は既に五月となっていた。府の北方に上って暑さを避けようと考え、二七日に府城を出て北へ向かった。けれども、やはり巡歴に出掛けようという気持ちになり、考試を行って、延安府で休もうと考えた。しかし、この日の夜は、三原県に辿り着いただけである。

### 【三原県】

涇水・渭水を渡ると高原が連なり、南渭・北涇の間にあって、北に嵯峨山を望みつつ進むと、次第に蒼翠が迫ってきた。三原には一日居て、温純光祿を訪ねた。光祿はのとき休暇中で、私と一緒に川を渡って端穀公<sup>17</sup>の故郷を

訪れた。そこには綽楔<sup>⑮</sup>が厳然と立てられていた。

三原には南北に二つの城があるが、ともに峻しい坂の上に位置し、その間に清峪水がある。その川は北城を抱いて流れているため、県の官衙は南城に置かれているものの、縉紳世家はみな北の里に住んでおり、堪輿の説は誠であつた。温純光禄は私を引き留め、酒を酌み交わしながら昔のことを語つた。

この日は暑く、耐えきれなかつた。そこで次の日の朝、孔子廟「文廟」を謁して、諸生に講義し、北へと向かつた。

三原の城の南北はみな肥沃な土地で、長安よりも勝つていた。県城から北へ十五里ほど行くと村があり、山を背にしているが、そこは文德皇后（唐、太宗の皇后）の故郷だという。調べてみると、皇后は洛陽の人であるから、どうしてここで生まれたとするのか分らない。これより北は山々がかさなり、土地は瘠せ、ふたたび沃野を望むことはない。

#### 【富平県】

しばらく行き、富平県との境に入った。人家を見ると、流水が垣の内にあり、緑竹が一万本ほどもあり、また泉の磨れる音がし、流れる水は激しく打ちあっている。尋ねてみると、みな耀州左氏の別荘だという。しばらく進み、大きな川に沿って行くと、一枚の綽楔に「漆・沮既に同じ」とあり、はじめて二つの川の合流点であることを知つた。

#### 【耀州】

更に進んで、耀州城を望み、果てしなく広がる砂原や砂漠を通り過ぎると、左右両側が山に夾まれた。左側の山々は五台の磬玉などの諸峰<sup>20</sup>である。五台は真人孫思邈<sup>21</sup>が得道した場所で、山には洞穴や洗薬池がある。そこで私は詩をつくった。耀州に停まり二泊したが、それは遅れてやって来るものを待っていたのである。ここでも、やはり諸生に講義し、終ると、同官県へと疾駆した。

そこまでは、山々に別段変わったところもなかった。ところが耀州から北に向かうと、万山が連なり、とがった岩がとび出し、日々泪水を左右に見ながら進んで行った。すると、にわかに登りが急になり、珍しいものを見聞しても、応接する暇がなかった。

【同官県（耀州下）】

同官県は古の銅官で、西安府の北の境である。県城は小さく堅固で、右に高い山がある。民のつくった寨がその上にあり、県の障塞となっていて、甚だ雄ましい。

そして県城を去ると、東北の方向に孟姜女<sup>22</sup>の祠<sup>ほこり</sup>がある。伝えられるところでは、姜女が夫の亡骸を背負って、この山の麓で休憩したが、突如苦しみ出し、亡くなってしまった。土地の人は哀んで彼女ら夫婦を葬り、後にこれを祀るようになったが、金釵の別称もある。私はここを往返したが、その時が早朝もしくは夜であって、残念ながら酒を注いで祭る酹には及ばず、わずかに短い歌をつくっただけである。

そこから三十余里で、金鎖関に至る。道は両側が険しい崖で、泪水の谷川を上った。そのほかは天が設けた奇險であった。関には巡檢がいて、守りについていた。嘉靖年間に虜が大挙侵入し、遊撃の騎兵がここに至った<sup>23</sup>。その

ため亭や障塞を増設し、谷川の上に橋が架けてあるのであった。

金鎖関の北へ十余里ほど行くと、山々には奇妙な岩があり鉄のような色をしており、また両側の崖は、谷川の水を束ねて甚だ急であった。谷川の石は流れに逆らい、沮水が石を押し流すとき金属がぶつかりあうような響きを生じ、まためぐり流れる水は様々なかたちをしている。微かに廬山三峽の趣きもあるが、山には通ずる小道もない。小道が窮まるごとに川を渡ったが、およそ十数回に及んだ。これを楽しむことができれば、人は疲れを忘れられる。

峽を出て哭泉に至り、始めて沮水と別れた。延安府宜君県との境である。

## 二 延安府へ

### 【宜君県（鄜州下）】

宜君県は延安府にあり、甚だ広い。県城は山の中腹から下にあり、外からは傾いているように見え、また中に入ると、城壁は崩れ、垣はやぶれ、石ころが転がり、出塞の悲がある。

### 【中部県（鄜州下）】

宜君より中部までは万山の中を進んだが、山は高く寒かった。

六月は暑くなく、また他に変わったこともなかった。十里行くと、側に一つの碑を見つけた。「軒轅黄帝」とあつ

た。台下に諸山を見ると、一つの山だけが突出し、万木が鬱蒼と繁っていた。尋常でないのを訝って尋ねたところ、黄帝の橋陵だという。その山は空高くそびえ、沮水が昔その下を流れていたので、橋山という。<sup>24</sup> いつ川が塞がり、城の西南を通るようになったのかは、分らない。軒轅台より曲がり、しばらく行くと、沮水の流れが盛んになり、中部が橋山を枕にしている様を見た。多くの家々や緑の木々は鮮やかで美しい。その東に一坪の垣があるが、その上は古の坊州昭唐刺史の住居だったところである。

ここから先は一日中雨が降り、沮水はにわかに漲ぎった。従者はみな籃輿を担いで渡り、城内に入った。一食とって直ちに出發し、橋山に沿って北へ向かった。しばらく瞻仰して詩を一句つくり、さらに進み、隆坊鎮で食事をした。

隆坊鎮は中部県おかほの属里で、また古の牧場であり、住民がかなり稠い。鎮を出て北に向かうと、山は平らになり、陸禾きびや黍が鬱然と繁り、一望しても極まるところがなく、頗る沃野のようであった。

# 【鄜州】

しばらく行くと、鄜州との界に入った。このあたりは上り下りが峻しい坂道で、舁夫（籃輿の担ぎ手）は喘いだ。ふと下を見ると、一本の川があり、城がこれに臨んでいる。三川駅25というのは古の三川県であり、杜少陵（杜甫）が兵を避けた所である。三川は、黒源と華池の二つの川が合流し、さらに駅の東南で洛水と合わさるので、三川という。少陵の詩に「三川の漲るを觀る」とあるのは、この川である。土地の人は葫蘆河と名付けているが、唐人の詩に言う葫蘆河は、ここではないようだ。



下り坂は緩やかで、一里ばかり行き、駅に入る。壁の詩牌（詩を記した木の板）を見て、少陵の遺蹟があることを知り、欣然としてそこを訪れた。駅を出てしばらくして溪谷を渡り、南へ進むと、岩がそそり立っていた。その岩には多くの前人の題名が刻まれており、少陵の門聯（門の両側に掛ける対句を書いた札）も刻んであると言う。土石の間より、それらの文字を見ると、後世の人が似せてつくったものようであるが、刻んだ痕跡は既に曖昧になっている。土地の人が、少陵には地下室もあるが山の上だと言うので、私は泉石の間を匍匐し、険しい山道を上って、一つの洞窟に辿り着いた。しかし少陵の住居であったことを証明するものは何もない。その下に、ひとり泉が土の中より流れ出し、谷間にしたがって下り、溪谷に注いでおり、景勝に供するだけであった。戻って駅の中に泊まった。

次の日は、ひどい霧となった。葫蘆河は幅が半里ばかりあり、輿夫（籃輿の担ぎ手）が霧の中を渡るのは難儀であった。六十余里行き、坂を下ると、泉が谷間より出で、石橋がその上に渡してあるのが見え、鄜州城が近いことを知った。橋を渡って上り、やっと洛水を見ることができた。

洛水は、慶陽府より流れ出ている。その源では延安の諸水を集め、濁り具合は涇水以上だが、南の洛水には及ばない。洛水沿いの土地はやや肥沃で、土地の人は水を引き入れて田を灌漑し、稲を種えている。これを見ると、故人に会ったかのように欣然とした。次第に鄜州城に近づいた。

州城は壮麗で、南北は何れも三重に城をつくり、門には樓櫓（敵情を見るための櫓）も完備している。東は二重になっているが、城は山と上下している。ただ西のみは洛水に迫っており、僅かに一重の城だけで、備兵使者胡君

はここに居た。胡君は北城の樓に宴席を設けて、私を迎えてくれたが、「後日に」と辞退した。というのは、この州も会考<sup>26</sup>を行う場所だったからである。

【甘泉県】

この日は九十里も疾駆し、甘泉県に至って泊まったが、時は既に夜になっていた。

鄜州城を出てから洛水に沿って行くと、巨石が川の辺に迫っていた。物好きが、その上に名前を勒んで残していた。

ふたたび洛水を渡るのに、私だけが輿夫にたのんで渡り、馬に騎る者はみな四角に組んだ方木の中に坐し、人がこれを推して通った。温泉・甘泉<sup>27</sup>を経たが、住民はみな山間にあつまって住み、泉がチヨロチヨロと流れ出ている。洛温に入った者が山を出ると涼しく感じ、その水が甘美で、県の名はこのことから付けられた。

甘泉以南は、洛水の奔流がかなり大きいが、甘泉以北では次第に細流となる。三回渡るが、何れも僅かに蹀が浸かる程度だという。

鄜州から延安にかけて、住民は川によって聚落を成しているが、必ず山の頂上に堡を築き、胡虜の侵入を防いでいる。胡虜が至ると、奔ってここに立て籠もるのだが、それでも安全という訳ではない。

しばらく行き、上を仰ぎ視ると、一つの山が甚だ峻しくそびえている。その上には小城があるが、それもまた人々が虜寇を避けるための堡であった。

そして、さまよいつつ上り、遂に野豬峽<sup>28</sup>というところに至った。公館はここに設けられている。ここは延安への

太道であった。ここより千峰万壑であつて、洛水はどこへ流れていくのか分からず、一本の谷川に沿って進んだ。水は潺潺として流れ、初め洛水だと思つていた。しかし、よくよく見ると、北へ流れている。これまで見てきた諸川は皆南へ流れていたが、この川のみが北流している。確かに甘泉より出て山中で別れ、延安府の南を掠めて吐延川に合流しており、本場に「一郡堪輿の勝」と言える。その川は延安府に近づくと、次第に水量が増して大きな川となり、水は漫々と流れる。そしてその傍には大山や巨石があり、府の官衙は置かれていないかのである。遠くを眺めると、僅かに浮図山の半ばが見えるだけであつた。

#### 【延安府】

このようにして五、六里行くと、山の凹地に入り、やっと次第に平地になつた。住民は両山の間に住んでいるかのである。進みつつ稍や北に向きをかえると、関廂（見張り場）の城郭が見えた。その城の周囲はあまり広くなく、四方には何れも山があるけれども、北側のみは山が低く、空き地がある。これが綏德州に通ずる路である。

延安府学は北門の外にある。私は到着して三日目に行香をおこない、諸県の生儒を集めて講義し、終ると、建物に鍵をかけて試験を課した。試験場となつたのは察院（御史の衙門）である。そこは頗る高い所にあり、四方がよく見えた。南は嘉嶺山といひ、范文正公（范仲淹）が知州であつた時に題名したところで、浮図山はここにある。

樹木はまばらで、諸々の繚垣や室宇は楚楚として見えた。その西側には山があつて甚だ峻しく、城はその峰続きの最も高い所にある。城樓が設けられ、空高くそびえ、また立派な眺めである。しかし最も勝れたところは東の清涼山である。吐延川が城の東側にあり、清涼山がまた川の東に臨み、登ることができるかのように近かつた。伝えら

れるところでは、屍毘王が修行を積んだ場所だという。それゆえ上に屍毘巖があり、清涼寺はこれに由来して建てられている。また川の別名を濯筋水というのは、屍毘王が嘗てここで筋を濯いだためだという。<sup>(30)</sup>

山の北側には巨石があつて高く峻しく、川の流れを見下ろしているかのである。その傍に仙石洞があり、また南は万仏洞となっており、その内部には大小の石仏一万余が刻まれている。試験場の中よりこれらを望むと、遊んでいるかのようにはっきりと見える。毎月山に出ると物見台に上ったが、そこからは、まるで画が並んでいるように見え、何よりも絶勝であつた。私は試験を終えると、そこに登った。すると、たまたま御史が曇陽子<sup>(31)</sup>のことを論じているのを耳にし、勅命を受けていて無理だとは分かっているけれども、居ても立ってもいられなくなった。私は病氣を理由に二度休みを乞い、けっきょく潼関に戻ることとし、また試験が終了したことを上疏したのである。

翌六月二十四日、降りしきる雨の中を清涼山に向つたが、遂に登ることはできず、絶句四句をつくつて伝舎に書き留め、思いを寄せた。この日、雨は止んだ。そこで甘泉県を通つたが停まらずに、ふたたび洛水にそって行き、初めて隔河真武宮を見た。その宮は高い山の上にある。かつて一人の道者がここに居り、人相を見るのにたけていた。屋宇は甚だ麗しく、また綽楔が川の東に立てられている。官道よりこれを望むことができ、とりわけ見る価値がある。

夜は郵亭（宿場の旅館）に泊まつた。次の日の朝、洛水を渡ろうとしたが、夜の雨で俄に水かさが増し、困難であつた。馬は皆浮かびながら過ぎたが、甚だ危険であつた。私が乗つた輿も方木の上に載せ、数人が浮かびながらこれを引っ張つた。というのは、川底の泥が厚い糊のようだったので、人や馬は歩き易かつたからである。

【鄆州】

鄆州に至った。試院（試験場）は既に毀れていて、諸生は嘆息して私を引き留め、そのため私は胸を痛めた。この日の夕方、ふたたび三川駅に泊まったが、途中で二回大きな川を渡った。

【中部県（鄆州下）】

次の日、中部に至ると、家からの便りを得た。そこで王和石に返事を書くことにし、そのために停まり、一泊した。県城の西に滴珠泉があるが、いまだ見たことがなかったので、翌日は思い切って車を停めた。その泉には亭があり、ちょうど石壁の下に掘っていた。その前には石で池がつくられ、水草を植えてあった。大きな岩が亭の西にあり、泉はぱたぱたと落ちて、池の中に流れ入む。前には大きな谷を臨み、甘菊を多く産し、そのため花珠泉とも呼ばれている。おそろく『一統志』に記された「一線泉」であらう。<sup>(32)</sup>

【宜君県（鄆州下）】

昼に宜君県を過ぎると、小雨となった。荒れ模様の山中を行くと、野花が咲き乱れ、十分に目を楽しませてくれた。

哭泉鎮に至り、はじめて灌木清泉を見た。哭泉とは、世に言う孟姜女がここを通り過ぎたときに激しい渇きに襲われ、哭いたところ、泉が湧き出たので、土地の人がこれを祀ったといわれるところである。祠ほこみの前の亭にある井戸が、いわゆる哭泉である。私は車を下り、揖讓（会釈）して通り過ぎた。

### 三 ふたたび西安府へ

#### 【同官県（耀州下）】

再び同官峽に入り、金鎖関を経、沮水を愛でつつ進んだ。途中、泊まることができず、深夜にやっと同官に至り、宿を取った。

#### 【耀州】

翌朝、耀州に至った。補考<sup>33</sup>のために諸生が遠方よりやって来るのを思うと、また空しく帰らせることはできない。そこで、堂皇にて知州が試験を監視するが、私はその後のことを察して、厳格に試験を行った。終ると、規定に従って取捨し、一度定めた合否を、のちに変更することはしなかった。しかし、胥吏が合格者を貼りだす段になって、猶お使者である邢子愿<sup>34</sup>の意に合わないのを恐れつつ、遂に両台（布政使・按察使）におもねった。時に子愿は河東を巡察しており、大雨にもかかわらず、敕印を有する胥吏が遣わされて来たため、私はそこに留まることができなかった。

#### 【富平県】

日を数えると、七月朔日になっていた。翌朝雨は上がり、間道より富平県に向かい、騎馬の従者に伝えさせて、人々には必ず行くと知らしめた。

初め三原県より来たときは、西の道によったので、二つの川の分合は詳らかにできなかったが、帰途は耀州城を出てから、大きな川に沿って進んだので、漆水・沮水の二川の流れを見ることができた。私は軽やかな気持ちになった。沮水は州城のうしろで東へ折れ、五台の下を経て南へ流れ、そして漆水が不意に城の右側より至る。『図経』によると、扶風・武功両県より流れ来るはずのものであり、『大都一統志』には、「二水、未だ真ならざる的多く、身歴の真と為すに若かず」とある。時に雨の後で、二つの川はそれぞれ怒りを含むかのように激しく流れ、集まって一本になり、波が起こり沸きたつような音がしていた。車は川を渡って東へ進み、川にそって行き、しばらくして別れた。

あたりは秋の気配が漂い、爽やかで、川原は平遠で、禾や黍が美しく茂っていた。私はにわかに職を辞することを決心して、身の軽さを覚えていたが、やはり触れるところは美境に違いなかった。遥かに青山一帯を望むと、白雲が盛んに立ち上っている。しばらくすると、峻峰が雲際に見え隠れし、近くなったり顕らかなりになったりし、はじめて少華の諸峰であることが分かった。

### 【渭南県】

渭水に至り、石炭を積む船で大きな流れをわたった。非常に速く岸に着き、渭南に入った。私はもともと城廓（役所）に居るのを好まなかったが、たまたま巡茶御史が到着すると聞いたので、山に民家を求めて会うのを避けた。摂令（兼知県）が来て、「城南は南氏の庭園だが、憩う場所としては最適だ」と言うので、欣然としてそこに赴いた。その園は豊原の下にあり、泉をあつめて池をつくり、柳を植えて小道を開き、二階建ての館舎をつくり、

また池は蓮の園で、花が開いて盛んに垂れ、私はその奥深さに満足した。この時は非常に暑く、この庭園に立ち寄って帯を解き、扇を揺らせた。はじめ私は、六月に延安に居たが、夜は中堂にむしろを敷いて眠り、涙がこぼれた。ここに至ると既に七月で、暑さは倍になり、気候は頓に異なっていた。

南氏というのは、もと吏部の南君軒のことである。堂の名は姜泉書舎といい、彼の父憲副君の別号による。<sup>(35)</sup>南君は私を慕い、酒肴を手に来るようにと誘ったが、私は固辞し、夜に話をする約束をした。しばらくして天池に出て、ともに新茶を啜って別れた。翌日、使者の来るのが遅れたので華州に停まり、宴をひらいて官僚のご機嫌をうかがうことにした。そのため一日居ることとなり、姜泉の詩二句をつくったが、これは南君の願うところでもあろう。南君は従子の進士、息子の挙人とともにやって来て、挨拶をして別れた。そして、朝早くに出発し、華州城に入って小休止し、ふたたび出発した。

# 【華陰県】

華陰への道中では、崩れかかった山の下を通り過ぎた。時に蓮の池には水が溢れ、紅い花が十余畝にわたって咲いており、稲田、柳の岸、青い山、流れる水は、江南の人家の風を感じさせるが、勿論そこには及ばない。そして、やや東に進むと、太華三峰（華嶽三峰）が雲をこするほどに高く突き出し、蒼翠は人の心を打ち、遠くふたり近くなったりし、また去るようでもあり迎えてくれるかのようでもあり、真に神仙の境である。

華陰に一泊し、朝、潼関に趨き、嶽廟の下を通り、中に入って金天王に謁した。廟宇は雄大壮麗で、楸や柏の木々が森列し、人に肅然とした気持ちを起こさせる。しかし規模は東嶽に及ばない。門を出て三峰を見ると、真正面に



あたる。石筍が縦横し、黛色をした滴のようで、玉女・蓮花・仙掌の諸峰は妍を争い秀を競っている。そういう訳で、私は住人たちが日々仙都（仙人の居るところ）にいるのに、自ら気付かないことを歎いたのである。

これより前の出使の時に、青柯坪より南峰の頂に至り、華嶽の勝はここに窮まった。振り返ると、嶽廟はいまだに拝謁していない。そこで排律一句をつくってこれを頌え、潼関の伝舎の中に書きとどめた。かつて私が合格とした華州と華陰の二人の貢生は、ともに私の教えに感じ入り、自ら奮いたち、太学に入學するのを願わなかった。しかし、この時になって希望を失い、争って迎え、泣きながら私を引き留めたので、潼関に至らせ、まる一日、一緒に道を論じ文を課した。

潼関の劉使君は立派な人士で、私を敬って、日々酒を載せて訪れた。伝舎には高台があり、潼山を四方から眺めることができ、使君が来るたびにそこに坐し、あるいは月下に歓談し、帰る時を忘れてしまうほどだった。両台は私の志を変えさせることができないのを知り、また同年の朱方伯（36）がこのための仲立ちをしてくれて、とうとう私は辞職を乞う上疏を題し、七月十三日を以て、長駆出関した。

常日頃から陝西にある古の帝王の遺蹟を慕っていたが、六年の間に二度もその地を訪れることができたのは、奇縁と言うべきで、周りはその遊歴をうらやむ者ばかりである。武功・邠岐両県の間には伏羲画封台、周家豊邑など多くの遺蹟があり、褒斜の棧道（四川に通ずる要路）は、古から天険と称えられた。終南・太白・崆峒・吳嶽は何れも名山で、名にし負う所が至って多い。

碑版が盛んなのは、長安の府学内であった。唐の玄宗の孝経四面穹碑は、最も完全な姿の石経であるが、地震のために傾いたり折れたりしたものも多い。聖教序と夫子廟（孔子廟）堂碑はともに折れてしまっているが、そのほかの顔真卿や柳公権の諸碑は、みな完全に新しいものである。王右軍の千字文は、鄭駙馬潜曜の書で、懷素の法帖である。聖母律公は少しは良いが、それ以外には、とりたてて述べるほどのものはない。まさに残碑・断碣を採し求めたが、漢や魏の人のものは一字として得ることができず、残念である。聞くところでは、始めの災厄は向拱の摹打にあり、二度目の災厄は韓縝の灞橋改修にあり、三度目の災厄は開平の築城にあったという<sup>(97)</sup>。果たしてそうだったのであろうか。

わが兄の元美（世貞）は、つねに陝西を知らないことを残念に思っており、私に届いた手紙には次のようにあった。帰るときに紀行文を記し、お前の兄の臥遊に当てるべし、と。残念なのは、見物して回ったのが、わずか以上に記した場所に止まることで、帰って、奚囊（作った詩を容れる袋）を求められても、その中身は重くなく、期待はずれにさせてしまうのではなからうか。

七月廿三日、世懋、黄河に浮かぶ舳艫<sup>こぶね</sup>の中で記す。

〔註〕

- （1）西安府は六州、三二県を領す。六州のうちの一つが耀州で、その下に同官県がある。
- （2）延安府は三州、一六県を領す。三州のうちの一つが鄜州で、その下には宜君、中部、洛川の三県がある。

(3) 華陰県東方の潼関には軍衛が置かれていた。『大明一統志』卷三二・西安府上・関梁に、潼関について「華陰県の東四十里に在り。歴代皆要地と爲す。本朝は関内に軍衛を置きて防守す。」とあり、『明史』卷四二・地理志三・陝西・西安府・華州・華陰に、「東に潼関有り。洪武七年、潼関守禦千戸所を置く。九年十一月、升せて衛と爲し、河南都司に属す。永樂六年、中軍都督府に直隸す。」とある。なお『大明一統志』については、周知のように顧炎武『日知録』などによって、記事の誤謬が指摘されている。しかし当該時期の陝西省の地理を知る資料は多くないので、参考までに提示することとし、誤謬等は後日検討することとしたい。

(4) 明代には巡茶御史をおいて、茶葉の販売を監察させた。『明史』卷八〇・食貨志四に、「成化三年、御史に命じて陝西に巡茶せしむ。」とある。

(5) 華山を華嶽（または太華）といい、その蓮花峰・仙人掌・落雁峰を華嶽三峰（または太華三峰）という。

(6) 『大明一統志』卷三一・西安府上・宮室に、興慶宮について「府治の東南五里に在り。唐の南内なり。玄宗建つ。内に文泰・南薰・大同等の殿有り。」とある。

(7) 唐の玄宗が興慶宮の西南に建てた花萼相輝楼で、花萼楼はその略称。同右に、花萼相輝楼について「勤政楼の西に在り。玄宗、寧薛諸王と篤く友愛し、常に此の楼に登り、諸王を召し、榻を同じくし飲宴す。」とある。

(8) 同書・同卷・西安府上・山川に、凝碧池について「唐の禁苑中に在り。……」とあり、同じく宮室には、沈香亭について「唐の興慶宮に在り。玄宗建て、開元中、嘗て木芍薬四本を亭前に移植せり。……」とある。

(9) 同右に、終南山について「府城の南五十里に在り。一名は南山。東西、藍田・咸寧・長安・整屋四県の境に連亘す。……」とある。

(10) 同右に、白鹿原について「藍田県の西五十里に在り。周の平王の時、白鹿有りて此に遊ぶ。晉書に、符雉、桓冲と白鹿原に戦ふ、と。」とある。

(11) 同書・同卷・西安府上・寺観に、慈恩寺について「府城の南、曲江の側に在り。唐の高宗、文德皇后の為に建てり。」とある。

(12) 唐、銭唐の人。字は登善。博く文史に渉り、楷書・隸書に巧みであった。『新唐書』卷一〇五に伝あり。

- (13) 『大明一統志』卷三一・西安府上・寺觀に、薦福寺について「府城の南に在り。本、隋の煬帝の潜藩。唐、建てて寺と爲す。神龍より後、仏經を翻訳し、並びに此に蔵む。……」とある。
- (14) 同書・同卷・西安府上・山川に、嵯峨山について「涇陽県の北五十里に在り。一の名は嶺巒、又の名は慈峨。山の巔に雲起れば輒ち雨る。人、以て候つと爲す。」とある。
- (15) 邠州とその州下三県、乾州とその州下一県をあわせて実施。
- (16) 溫純。字は景文。三原の人。嘉靖四四年の進士。『明史』卷二〇に伝があり、万曆初に河南參議に任ぜられ、同二二年には兵部右侍郎兼右副都御史、巡撫浙江となった。
- (17) 王恕のこと。字は宗貫。三原の人。正統一三年の進士。孝宗が即位すると、吏部尚書に任ぜられ、正徳三年に卒す。端毅は諡。『明史』卷一八二に伝あり。
- (18) 善行を表彰するため、正門の兩側に立てられた木柱。
- (19) 文徳皇后は、洛陽を本貫とする北方系の名門長孫氏の出。
- (20) 『大明一統志』卷三二・西安府上・山川に、磬玉山について「耀州城の東五里に在り。山、青石を出だす。……」とある。
- (21) 孫思邈。唐、華原の人。百家の説に通じ、長じて太白山に居る。唐の太宗の顕慶中、諫議大夫に拜せられたが、固辞した。永淳の初、百余歳で卒す。『新唐書』卷一九六に伝あり。
- (22) 『大明一統志』卷三三・西安府下・列女に、孟姜女について「同官の人なり。秦の時、夫、長城に死せるを以て、自ら遺骸を負ひ、県の北三里許にて、石穴の中に死す。」とある。
- (23) 金鎖関については、乾隆『西安府志』卷一〇・建置志中・鎮堡に、同安県志を引用して、「県の北三十里に在り。……嘉靖三十年、巡撫張璠議すらくは、邠州より省城に南下するを以て、金鎖関は至って衝要爲り。宜しく築城戍守し、以て套寇の突犯を防ぐべし、と。之に従ふ。」とあり、また耀州志を引用して、「(嘉靖)三十二年、知県兀慶鴻、始めて関城を築き、巡司を置けり。後、裁す。」とある。これらによると、胡虜の侵入が嘉靖三〇年頃、巡檢司の設置が同三二年であつたことが分かる。

(24) 黃帝が橋山に葬られたことについては『史記』五帝本紀第一・黃帝を参照。また『大明一統志』卷三六・延安府・山川に、橋山について「中部県治の北に在り。下に沮水有り。或は云ふ、水、山底より經過して橋の如く、即ち軒轅黃帝、衣冠を葬る所なり、と。」とあり、同じく陵墓には、橋陵について「中部県治の北に在り。世に伝ふらく、軒轅黃帝は坊州に生まれ、後、衣冠を此に葬れり。本朝（＝明朝）載ごとに祀典しつつ在り。」とある。

(25) 『大明一統志』卷三六・延安府・流寓に、杜甫について「唐の襄陽の人なり。禄山が乱あり、甫、兵を三川に避く。肅宗立ち、復た鄜より行在に奔り、右拾遺に拜せらる。……」とあり、また同じく古蹟には、杜甫宅について「鄜州城南六十里に在り。甫、因りて難を此に避く。」とある。さらに、同じく山川には、三川水について「鄜州の南六十里に在り。華池水・黒源水・洛水、同に会するを以て、之を三川と謂ふ。唐の杜甫の詩に、三川不可到、歸路晚山稠落、雁浮寒水、餓鳥集戍樓とあり、又、三川の水漲るを觀るの詩有り。」とある。

(26) 學生が卒業にあたつて、他校の學生と一緒に受ける試験の第一次を会考という。

(27) 温泉は、『大明一統志』卷三六・延安府・山川に、温泉山について「甘泉県の南四十三里に在り。下に温泉有り。」とある。また甘泉については、同じく甘泉について「甘泉県治の南五里の岩谷中に在り。飛流激下す。隋の煬帝此に遊び、飲みて之を甘しとす。……」とあり、甘味があつたという。

(28) 同右に、野豬峽について「甘泉県の北四十五里に在り。山峽險窄なり。」とある。なお嘉慶『陝西府志』卷九・輿地考一・甘泉県・山川には、「（県城）北四十五里、野豬峽有り。（割註。県志。……明の嘉靖三十年、撫臣張珩議して、堡を此に築き、以て敵の南入を遏る衝となせり）」とある。

(29) 同右に、嘉嶺山について「府城の東南に在り。形勢は高峻なり。宋の范仲淹、嘗て嘉嶺山の三字を大書し、石に鐫めり。」とある。

(30) 同右に、清凉山について「府城の東北に在り。上に屍毘巖有り。相伝ふらく、昔、屍毘王脩行せる処なり、と。又、万仏洞有り。内に大小の石仏万余あり。又、仙石洞有り、山の北に在り。石に刻みて云く、金の皇統九年、梁文仙鑿つ。……」と、同じく延水について「府城の東門の外に在り。……俗に濯筋水と称す。相伝ふらく、昔、屍毘王、身を割き鴿を殺し、身肉並びて此の水に盡き、其の筋骨を濯ひ、因りて名づく、と。」とある。

(31) 曇陽子。王錫爵の女で、名は素貞。曇陽子はその号。徐景韶の許嫁となったが、嫁ぐ前に景韶が亡くなった。幼くして観音大士を奉じ、得道して仙人に化したと言われる。

(32) 『大明一統志』卷三六・延安府・山川に、「一線泉について「中部県治の西南に在り。之を酌み、以て疾を療すべし。」とある。

(33) 未受験者及び不合格者を対象に実施する試験。

(34) 邢侗。子愿は字。臨邑の人。万曆二年の進士。南宮知県、御史參議、陝西行太僕寺少卿などを歴任。書を善くし、詩文に巧み。『明史』卷二八八に伝あり。

(35) 南軒（字は淑後）は渭南の人。嘉靖三年の進士。吏部郎中、山東參議などを歴任。万曆三十五年卒す。軒の父が逢吉、字は元真、号が姜泉で、弘治七年生れ。嘉靖一七年の進士。礼部主事、保寧知府、山西副使などを歴任。万曆二年卒す。『国朝献徵録』卷九七・南公墓誌銘。

(36) 同年は同じ年の科挙合格者、方伯は布政使のことだが、具体的に誰を指すかは不詳。

(37) 『大明一統志』卷三一・西安府上・古蹟・歴代石刻には、残存する碑版について、「府学に在り。晋の王羲之が筆陣の図、隋の智永が真草千文、唐の刻む所の石経、明皇が八分書の孝経、張旭が草書の千文、懷素が草聖母帖、及び宋の修廟の記等の碑有り。」とあり、また碑版が少ない理由について、「宋の向拱、長安に鎮し、嘗て匠を督して摹并し、石本三千余を得たり。民、以て害と為し、徃徃其の字を鋭鑿す。後、韓縝、霸橋を脩し、工を督すること急なり。民、碑石を磨き、以て之に供す。長安の石刻、此の二厄を経て、存する者遂に鮮なし。」とあり、一度の災厄は本文と一致する。三度目の災厄に関して、管見の限り、開平の地は比定できなかった。向拱、韓縝は、それぞれ『宋史』卷二五五、卷三一五に伝あり。

〔付記〕

「関中紀行」は、一九九九年度に日本文学科・漢文学講読の中で、その一部をテキストとして用い、授業では書き下しと簡単な解釈に止まっていたが、ここに口語訳を試みた次第である。ただし人物の比定などに不明な点が残っており、検討を続けたい。なお末筆ながら、受講生諸氏に謝意を表する。